

いのでしょうか。その前提には、戦前の日本資本主義の確立・展開に関わる（大阪など紡績業の）原料棉花や機械の輸入なり、（郡是製糸などの）生糸輸出における神戸港の歴史的形があったと思います。

■金山正子（元興寺文化財研究所）

史料ネットは当初から独自のスタートを切られて、非常に頑張ってくられたと思います。その活動は確かに、行政と住民の双方に歴史資料についての意識付けをされていったと思いますが、今後、地域の中での歴史意識を成長させ、史料の保存を行政へも働きかけていくためには、住民と行政のダイレクトな関係が必要だと思います。住民と行政の双方の史料保存の自立を促す方向を探っていただけたらと思います（部会での鈴木氏のご意見には率直に賛同します）。歴史研究者の方々は、どうぞ救出した史料を実際に使った研究で住民に還元して行って下さい。

議論の方向性は、筋書き通り（？）にまともな意見が聞きたかったなあと思います（関西の史料保存担当者も多くいられていましたが、発言は関東方面の方ばかりでした）。

■北泊謙太郎（大阪大学大学院）

市民の歴史認識、及び古文書に対する考え方ということについて知る機会になったことはもちろん、自らの歴史認識についても、大いに考え直す機会となった様に思う。史料ネットの活動については、私も何度か参加させていただいたが、その時に住民の方々から聞いた話の中で多かったのは、「もう少し早く来てくれば、史料が残っていたのに」というものであった。これは、史料ネットの活動の制約上やむを得なかった点も多かったと思うが、地域住民の歴史認識も深く関係があるように思われる（明治以降の民具や古文書は価値がない、史料として価値があるのは大名や家老などの身分の高い名家の末裔のもの、せいぜい地主・庄屋までが下限、etc）。このようなことから、私は逆に、その「地域」がどのような歴史的経過を経てきているのか、という点について、以前より相当興味が増大したように思われる。

最後の討論まで残ることが出来なかったのも、各報告において少し感じた疑問点を述べておきたいと思います。藤田報告の中で、歴史と文化を生かした「被災地復興」をあげられているが、

新聞等で報じられているような自治体主導の都市計画事業に対するアンチ・テーゼとして、歴史学の立場からどのような提言を行えると考えているのか？ また、奥村報告では、歴史家と住民との間における歴史認識の共有ということが論点の一つにあげられていたが、具体的にはどの程度まで共有することを考えているのか。また、これは歴史学者と住民双方の歩み寄りの問題として考えておられるのか。

■近藤孝敏（貝塚市郷土資料室）

私は、関西の史料保存に関わる者なので、史料ネットの活動には注目しておりました（参加が出来ればと思っておりましたが、私が仕事を得ている地域史料の当面の保存に追われ、個人的にはほとんど参加できずに終わり、今でもそのことが自分のこだわりになっています）。残念ながら、史料ネットの活動と近畿圏の史料保存・管理者（アーキビスト）集団との連携を十分つくり上げられなかったことが残念に思われました（私も関係している全史料協近畿部会や歴史系博物館界が、全体として動かなかった原因を我々は改めて考えねばならないと思います）。

率直に言って、議論の前半はガッカリしてしまいました。史料保全活動の現実的課題からはずれ、地域史料の実際の保存にあたっている保存担当者として、あまりこの議論の意味がわからなかったからです。この議論を聞いて、地域史料の保全に何か役に立つとは思えなかったからです（それぞれの報告は有意味で非常に参考になりました。しかし討論は得心できるものではありませんでした、残念ながら）。歴史学者が何をこの活動から教訓としてくみ上げ、地域史料に関わる主体（研究者が関わった史料への執着すべき点）としてどうあるべきか？ という視点に立って、議論を出されたのでは、鈴木良さんほかわずかのように思われて、内心ガッカリしてしまいました。現実的に危機感をもって切実に史料保存の今後を考えると、どうしてもそう思われました。

■澤 博勝（福井県立博物館）

まさにボランティアという形での教員・院生・学生らの史料レスキューは、すばらしいと思う。ただし、私の勤務しているようないわゆる“地方”でこのような事態が生じた場合、どうすればよいか。教員・院生はほとんど存在せず、そういった人々の指導を受けた学生もいない。